

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前 : Niels Meggers (ニールス・メガース) (ドイツ)
- (2) 年 齢 : 73 歳
- (3) 参加事業 : 第 8 回「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」招へいプログラム団長、派遣プログラム (ドイツ) 受け入れ (2008 年度)
- (4) 職 業 : 2013 年末ドイツ連邦共和国国際ユースワーク専門機関 (IJAB) 退職。2013 年から「aktuelles forum e.V.」副会長 (ボランティア)



■参加のきっかけ

1978 年、経済学の修士号を取得しましたが、自分は大企業に入って会議をする仕事よりも、より社会や政治に関係した活動がしたいと思っていました。当時非営利団体で青少年向けの活動ボランティアをしており、興味を持った時にちょうど、ドイツ青年協議会 (German Youth Council) で国際ユースワークの職員の求人が出て応募しました。倍率は 50 倍でしたが、この仕事を得ることができ、自分は「ミニ外務大臣」になった気分です。予算や企画を実行しました。その 10 年後、ドイツ連邦共和国国際ユースワーク専門機関 (IJAB) に転職し、そこで 25 年仕事を続けました。

私はこれまで 25 か国との国際交流を経験しています。1990 年代の東西統合した後には特に、旧ソ連の国々、エストニア、ハンガリー、ポーランド、ウクライナなどの 2 か国交流などをしました。同時に、ヨーロッパ全体で多国間交流をするというトレンドも出てきて、今日では EU の青少年にかけられる予算は大変大きく (ドイツの予算と同様)、2 か国間交流も盛んに行っています。

私の「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」参加は、職業的なきっかけでしたので、他のドイツ参加者と違うものでした。当時私はボンにある IJAB の責任者をしており、ドイツ連邦青年省 (BMFSFJ) に代わって、国際ユースワークの分野で仕事をしていました。IJAB は今もなお、政府に代わってユースワークを実践し続けています。

そして 2008 年、内閣府から「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」の相手国となる要請がありました。両政府レベルの合意の後、IJAB (および私の部署) はドイツ側で、2008 年度の内閣府プログラムの派遣と受入の両方の公式パートナーになる役目を得ました。

2008 年後半の日本からの「ドイツ派遣団」を受け入れる興味深い経験を踏まえ、このような多国間プログラムが日本でどのように実現されるのか、このプログラムへの参加は、多かれ少なかれ私の「仕事上の動機かつ期待」でした。そして、このプログラムが今後の実施においても、ドイツの青年リーダーにとって、全 3 分野において有意義なものであるかどうかを知ること、もし内閣府から要請があれば今後相手国になるかどうかを判断することも考えていました。つまり、「**多国間プログラムである**」側面が、私にとって非常に特別な「公式な興味」の焦点でありました。

というのも、私は以前、ドイツ青年省と日本文部科学省との間で合意された公式の二国間青年指導者交流事業 (1996 年～) で何度か日本に滞在したことがあったからです。つまり、内閣府のプログラムに参加する前に、このような日本での経験のおかげで、日本のユースワーク、その構造や話題について、2 か国間への焦点と言うことはありつつ、すでに相当の理解ができていました。

■プログラムでの凝縮した体験

日本側（内閣府）がトピック、プログラム構成、プログラム全体のタイムテーブルを独自に決定し、そこに相手国を招待するというやり方は、両パートナーが共通のタスクとして取り組む「慣習」とは異なるものでした。しかし結論から言うと、当初は懐疑的であった私を含め、プログラムはドイツ参加者全員の期待に沿うものだったと言えるでしょう！私たちはプログラム終了時には疲れを感じていましたが、本当にユニークな活動に積極的に参加できたということで、とても前向きな気分で帰国することができました。

■日本という特殊な環境に、優れた参加者を集める

日本という特殊な環境下で、NPO フォーラムをはじめ、参加するすべてのパートナーと集中的な交流（二国間、多国間）を行うことができました。地域でのプログラムは、参加者それぞれの専門分野に特化した交流をしました。前述したように、青年リーダーの活動領域の異なる分野で、**短期間かつ集中的に多国間の対話**を「**日本という特殊な環境で**」行う経験は、内閣府のプログラムでしか得られないものであることは間違いありません。

内閣府のプログラムが他の組織・団体のプログラムと最も異なる点は、このプログラムが**日本参加者に対して無料で実施**（内閣府が 100%資金を提供）していることです。このため、ドイツと日本の二国間交流で参加者の費用負担があるプログラムが多い中で、はるかに多くの優秀な若いリーダーが参加に応募することができるのです。そして、この違いが、大変優秀な参加者を広範囲から集められ、並外れた多国間交流が展開できる可能性がある、最大の理由です。ドイツ参加者にとっても無料のプログラムは魅力的です。ドイツでは、日本と交流したいというドイツ青年は多く、特に漫画や寿司といった文化がすでにドイツに一般的であることも理由に挙げられます。通常、2 国間交流は参加者の個人負担費用がありますので、日本に興味があるドイツ青年にとっては、コアリーダー事業のような招へい事業は「日本」「招へい」の 2 つの理由で大変人気があります。

■プログラムの効果を高めるドイツでの研修

IJAB は、傘下にあるドイツ全土の非営利団体には全て同じオファーをかけることができます。選考プロセスでは、応募書類や面接などを経て、ドイツ代表として相応しい人を選出しています。そして、ドイツ政府から要請を受け、IJAB が事前研修を実施しています。日本での名刺の渡し方や、時間厳守の文化も教えたりしています。

青年には国際的な経験が必要と思います。ユースワークの経験を通じて、国際的なものに触れ合ってほしいと考えています。私はユースワーカーとして、ユースワークは面白すぎてやめることができないと思っています。

■日本のユースワークへの提言

ドイツから日本へは、「政府が非営利のユースワークをサポートすることの大切さ」を強くお伝えしたいと思います。Subsidiarity という言葉がありますが、社会的、文化的活動は非営利団体が主体となり、ユースワークも文化的施設も社会が実施すべきことです。ローカルユースワークは自治体によって実施されますが、しかし大切なのは自主的に実施される非営利のユースワークです。政府・行政が非営利団体への予算をつけることが法律で決められており（金額までは定められていない）、日本のユースワーカーたちはいつも、ドイツからこのことを学んでくれたと思います。

日本にはユニークな青少年活動があり、研究・調査も盛んです。最近では例えば、「青少年をメディアから保護する」というテーマで、映画スタジオや団体を訪ねたりしています。ただ、課題は「活動の継続性」で、民主的な社会を保つためには、非営利団体が継続して活動実施できることが法で保証されるべきです。政権が変わろうとも、このことは市民社会と

して続けていくべきです。現在、ヨーロッパ全体でも非営利団体の重要性やサステナビリティ（持続可能性）について、多くが語られており、継続のために法制化されているかが注目されています。

■プログラムが与えた影響

2013 年末から、私は年金生活者となり、キャリアパスというものは、自発的に行動する以外にはありません。しかし、この活動の経験や成果は、当時の私のリーダーとしての視野を広げ、私（そして他のドイツ参加者）にとって、自分の**リーダーシップの基礎**やそれぞれの**能力を再確認するよい指針**になりました。

私のワーキンググループでは、特に「ソフトスキル」強化が重要であると発表したことは有益でした。「ハードスキルは骨格であり、ソフトスキルは肉付けである」と考えます。そこで、より良いリーダーシップを発揮するために、4 つの核となるポイントを以下の通り強調します。報告書にもまとめましたが、今でも重要と考えています。

1. スタッフの声に耳を傾けることで、彼らの行動、動機、理由、ニーズに対する洞察力を高める
2. 信頼と尊敬は、アプローチが異なっても、同じ目的を達成するための双方向コミュニケーション
3. 理解とは、スタッフの背景、動機、倫理観、経験に対する認識と感受性であり、チームの能力を最大限に引き出すこと
4. 効果的な言葉の使い方をし、わかりやすく話す。文化の違いを意識しながら、聞き手に合わせた説明をする

■日本の印象

先に述べたように、私は内閣府のプログラム以前に何度か来日したことがあり、私の基本的な「異文化学習」は 1996 年から始まり、その後協力と友好を高めていきました。それ以来、日本でのあらゆる二国間プログラム、あるいはドイツでの多くの日本代表団、さらに内閣府のさまざまなプログラムでの有意義な経験によって、成長を重ねていきました。それはまさに「改良に向けた終わりなき調整」と言えるものです。

1996 年からの蓄積で、内閣府と文科省がユースワークに欠かせない大切な象徴で、青少年育成施策大綱 (National Youth Development Policy) を持つことや、地方のユースワークのこともよく理解しています。日本では内閣府と文部科学省の双方が青年プログラムを持っていることが、ドイツとは異なるため理解が難しかったです。文部科学省との 2 国交流は 38 年ほど続いています。参加者にとっては初来日の場合は、文化的に違いが大きいことから、インプットが大きい、かつインパクトが大きい、記憶に残るものと考えます。

私にとって日本に対する親しみやすい印象については、これまでと変化はありませんでした。しかし、より深い共通理解のための「改良に向けた調整」は非常に有意義で、これに基づいて「良き友人」として少し辛口になる場合も、意見を伝えられるようになりました。なお、日独友好への貢献が認められ、2014 年に日本政府から「旭日双光章」を授与されたことは、今でも私の誇りです。

■プログラム参加後の活動

前述の通り、2013 年末に退職し、その少し前から「アクチュエル・フォーラム」(aktuelles forum e. V.) (www.aktuelles-forum.de)でのボランティア活動を始め、現在も続けています。この団体は、市民教育や国際ユースワークのための非営利団体で、主にノルトライン・ヴェストファーレン州の参加者が活動するものです。市民参加により社会的な不平等をなくすことに重点を置いていることから、私はこのボランティア活動を開始しました。

数年前から、私は副会長 2 名のうちの一人として、事務局が実施する全プログラム、特に国際活動において、スーパーバイズとサポートを担当しています。私がこれまで培ってきた国際的リーダーシップの経験は、このようなサポート業務を行う上で間違いなく基礎となっています。

■参加者との繋がり

ヨーロッパの参加者がアジアやアフリカで研修をすることもあります。日本での研修は大変ユニークな体験と言えます。そして私たちは 14 日間、朝から晩まで濃い時間を過ごしましたので、2009 年の日本でのプログラム参加後、私を含むドイツ参加者の半数以上が、2009 年の訪日から 13 年間、必ず年 1 回は集まっています。イギリスの参加者の多くと、ドイツまたはイギリスでこれまでに 4 回ほど会いました。

また、私がその後日本を訪ねる時には、内閣府プログラムに参加した日本の友人たちに会うことがあり、内閣府職員の方とは 4、5 年前のドイツ訪問でお会いしたりと、交流が続いています。また何人かは、後にプライベートでドイツに来て私を訪ねたり、ドイツで勉強したりしていました。2021 年には、個人的なやり取りは書面で 1 度しかありませんでしたが、日本の友人たちとやり取りしたこと等の経験はすべて、私の心の中に深く刻まれています。

ニールス・メガース氏のプロフィール

ドイツ青年協議会での国際ユースワーク担当を経て、ドイツ連邦共和国国際ユースワーク専門機関（IJAB）にて 25 年間勤務、国際青少年政策協力担当部長。派遣の 2008 年度には青少年分野の日本派遣団の受け入れ、その後も複数年度に渡り青少年分野と高齢者分野の日本派遣団受入れに協力した。2013 年退職し、現在はボランティア職にて非営利団体「アクチュエル・フォーラム」の副会長を務める。2014 年、「旭日双光章」を受章。